



Title	<翻訳>ゴリー・タラッキー著「わが魂の太母」
Author(s)	藤元, 優子
Citation	大阪外国語大学アジア学論叢. 1991, 1, p. 133-147
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99641">https://hdl.handle.net/11094/99641</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## ゴリー・タラッキー著「わが魂の太母」

Goli Taraqqi, "Bozorg-banu-ye Ruh-e Man"

*Ketab-e Jom'eh*, I, 5, (Tehran, 1989), pp. 38-50.

藤元優子・訳

### 解説

「わが魂の太母<sup>(1)</sup>」は、イラン・イスラーム革命の直後に創刊され、間もなく廃刊を余儀なくされた重要な文芸誌『金曜の本（*Ketab-e Jom'eh*）』に発表された短編小説である。

著者であるゴリー・タラッキーは、1939年にテヘランに生まれた。出版家の父をもち、アメリカで大学教育を受けたゴリーは、帰国後企画庁に当たる政府組織で1960年代を過ごしたが、その後テヘラン大学で哲学の教鞭もとっていた。

作家としての彼女のキャリアは、1969年に発表された短編小説集『私もチエ・ゲバラだ（*Man ham Cheh Gevara Hastam*）』に遡る。その後、73年には『冬の眠り（*Khab-e Zemestani*）』を出版したほか、映画の脚本にも手を染めているが、この小品は彼女が自分の傑作の一つと自負するもので、1985年にはフランス語に訳されて、彼の地で文芸賞も獲得した。

作者は、革命とそれがもたらした混乱を横軸に、とある大学教師のカーシャーンへの小旅行を縦軸にとり、主人公のテヘランでの日常生活と、カーシャーンの一夜の夢のような体験とを交ぜにして語ることで、革命の熱狂と混乱と、母なる大地に抱かれた人間の安らぎとを、互いに際立たせることに成功している。

この作品は元々、著者の親しい友人で、画家、詩人として知られたソホラーブ・セペフリー<sup>(2)</sup>と著者との実際の旅行体験を下敷きにしている<sup>(3)</sup>。

カーシャーンはテヘランの南約250kmに位置するイラン最古の都市のひとつで、東部にはキャヴィール砂漠が横たわるカナートの町でもある。また、カーシャーンの西6kmにはフィーンという町があって、「フィーンの泉」として知られる美しい泉と庭園がある。タラッキーが、カーシャーン出身のセペフリーと実際にどんな時を過ごしたのかは知る術もない。だが、宗教革命の熱にうなされているような首都を逃れた作家が、太古からイランの人々を育んできた広大な自然の懐で、見失いかけていた自分の位置を再発見したことは想像に難くない。

筆者は1985年にタラッキーに会う機会を得たが、冗談好きの大変頭の回転の早い女性という印象を得た。現在は、哲学者で彼女の良き「パートナー」であるダーリウシュ・シャーイエガーンと双方の子供達と共に、パリに住むはずである。

旅行の道連れであったセペフリーが、翌年にはカーシャーンの大地で永遠の眠りにつき、タラッキー自らは亡命生活を余儀なくされるという現実を思うとき、彼女が垣間見た美しい母の姿と、彼女が晴れやかな心で再会する日が来ることを祈らずにはいられない。

#### 翻 訳

### わが魂の太母

カーシャーン。やっと辿り着いた。野に出てみる。不案内ゆえ、道を見失う。空気はひんやりと軽く、目に見えない水滴と芳香に満ちている。

私は尋ねた。「ハイダリーさん、あなたはこの革命の何に貢献しているんですか？」

彼は身を震わせ、飢えと略奪を思って夜も眠れないと言った。

妻は言った。「私、家主が怪しいと思うの。きっとイスラエルと関係があるわよ」

彼女は窓の側にすわって、銀食器を磨いていた。機嫌良く、革命歌を口ずさんでいた。

空は、私の頭上に近く、手が届きそうだ。野に目を移せば、山裾まで一面緑で、ヘンルーダの茂みや赤いひなげしで覆われている。柘榴の木が、谷の斜面に数多く点在している。山肌は紫や瑠璃色や赤で、女性的な裸の山並みは、太古の女のからだの線を思わせる。そして地平は無限の彼方、無に至っている。ずっと向こうのボプラ並木の下で、男が地面に寝そべっている。私のそば近くでは、湿った土道の曲がり角で、警官が礼拝している。

私の足下に、世界で一番小さい花が生えている。

私は尋ねた。「詩人さん、あなたの歴史的良心はどこにあるのですか？」

「私はまだこの花を見た驚きに浸ったきりなのです」と彼はいった。

何とよく晴れて穏やかな天気だろう。風は緑の匂いがする。濡れた木と開いたばかりの花の匂いが。まるで天空の森を吹き抜けてきたかのようだ。それとも芳しい息吹に浸ったのだろうか。警官はまだここにいる。屈んで、額を地面につけている。

私の父は警官たちの銃殺には反対で、神への挑戦の意味を理解しない。

妻は「復讐はイスラームでは合法的なのよ」と言いながら、銃殺者たちの写真に見入っている。

友人たちちは言う。「出ていくべきだ」

友人たちちは言う。「とどまって、語り、書き、戦うべきだ」

友人たちちは競い合って新聞や政党やシンジケートを作る計画を立てている。

ハイダリーさんは、家の地下室に小麦粉と米と石油と穀物を詰め込み、絹の絨毯を我が家に持ってきた。貯金をおろし、金貨は袋に入れて首に吊るしている。

妻は突然神を発見し、興奮している。夜にはせかせかとイスラーム法学の勉強に励み、昼間は女性のための宗教教室に走り回っている。赤いマニュキアを剥がし、瞼の緑色のアイシャドウを拭き取ってしまった。賭け事はしないと誓いを立てた。髪を覆い、誰にも耳根っこを見られぬようにと大いに気を配っている。私の横に座って、悲しそうな目をしている。私にイマーム・レザー<sup>(4)</sup>のお言葉やら、神のお慈悲、帝国主義の邪惡、共産主義者の悪意の話をする。

「あなたは神様を信じないの」と妻は尋ねる。

私は神の不在を証明するために自殺した男のことを考える、人間が自分の運命の支配者なのであって、それに勝る意思など存在しないのだということを。

「あなたは天国と地獄を信じないの」

彼女は私の手をとる。皮膚が熱く、息が熱っぽい。妻とは別人のようだ。私の知っている誰にも似ていない。夜にはずっと目を覚ましていて。いつ見ても目を開けていて、私はぞっとしてしまう。・

大学は混乱している。だれかが演説して、聴衆はひっきりなしに祈りの文句でそれに応えている。鉄柵の向こうでは、砂糖大根や焼き芋や茹でたソラマメを売っており、イマーム<sup>(6)</sup>の写真が木々に吊るされている。老婆が私の行く手を遮って、殉教した息子の写真を私に見せる。賠償のことで、聞き慣れない名のアーヤトゥラー<sup>(6)</sup>を探しているという。

道は塞がっている。回り道をする。歩道は本や宗教歌のテープやスニーカーやジーンズや殉教者の写真で一杯だ。向こうの方では、民兵がイスラエル製のマシンガン<sup>(7)</sup>の使い方を教えており、木陰では男が妻子と弁当を広げている。学生が私の前に立つ。私に挨拶する。見覚えがない。顔を黒く塗って、顔と首の回りにチェックのスカーフを巻き付けている。上着がぶかぶかだ。ブーツも数センチ大きい。

私の授業は休講だ。学生たちは集会を開いて教授たちを欠席裁判にかけている。拳を壁にたたきつけて抗議している。学生たちは大学の廊下で自由の意味を模索するのに懸命だ。

彼らは尋ねる。「先生、言語の統一とは何ですか？物質が本質的なのですか、それとも思考の方ですか？眞実は歴史にあるのですか、それとも神にですか？」

学生たちは『ルーズベフ裁判<sup>(8)</sup>』や『マルクス評論』や『諸問題註釈<sup>(9)</sup>』を読んで仰天している。

扉を叩く音がする。真夜中だ。妻は驚いて飛び上がる。父は急いで酒瓶を隠す。ヘイダリーさんだ。粉乳と缶詰とインド産の醤油を持ってくれたのだ。ゼーゼーあえぎながら言う。「ガソリンはおしまいだ。小麦粉もない。コレラと天然痘がはやり始めた。もうすぐ皆が共食いを始めるぞ。皆飢え死にだ」

妻は泣いて、イマームが食べ物を持ってきて下さると言う。息子は嘲笑って、小麦粉の袋を呪いをこめて殴り付ける。真の革命は将来起るのであって、勝利は抑圧された大衆の手にある、と彼は信じている。昼間は工場に出かけているが、労働者たちと打ち解ける術を知らない。汚い服を来て、夜は靴を履いたまま眠る。

野はこんな事どもから何と遠く、また何と素朴で清純だろう。どうして旅行する気になったのか自分でも分からない。早朝のことだった。私は起きて、出発した。妻は礼拝していた。まだ文句を覚えていないので、紙に書いて壁に張り、それを読み読みやっている。

家主は中庭にいた。私を見るなり飛び上がった。震えていた。だれかを待っていたのだ。私の鞄に目をやって、「逃げ出すところですか」と聞いた。

私は「いいえ」と答えた。

「あなたの名前もリストに載っているんですか？」

私はかぶりを振った。

「私は捕まるんです。今日か明日。あなたも捕まりますよ。皆捕まるんだ」

父も目を覚ましていた。窓の向こうに座って、タール<sup>(10)</sup>の調弦をしていた。夜は起きていることが多い。レーズン一袋と圧力鍋を手に入れて、自家製の酒造りに余念がない。以前はタールを教えていたが、もう生徒はやって来ない。ムッシュ・アールダーヴァーズ<sup>(11)</sup>が夕方に尋ねてきて、一緒に酒を飲んでいる。ムッシュ・アールダーヴァーズは酒屋を閉じた。店に放火されたのだ。自分の家の一部屋を店にして、スーパーリー・パン<sup>(12)</sup>と梨の缶詰を売っている。ムッシュ・アールダーヴァーズは、帝国主義恐さに、イスラーム共和制信任の投票をした。

ハイダリーさんは革命評議会の仕事を探している。夜には金貨の袋を抱えて夜回りをしている。

私は立ち止まる。土の道が急に終わっている。目の前は一面、小麦畠だ。その間に胡瓜畠が散らばり、畠に沿って色鮮やかな花々が生えている。そして遙か向こうの山裾には、村落が糸杉の並木に守られて静かに眠っている。斜面では打ち捨てられた水車の傍を豊かな水量の川が流れ、石台の下には泉が湧いている。

私は体が軽くなった気がする。空を泳ぐタンポポの感じが。一人で歌う。

「花園は、草の匂いでいっぱいだ！」

私はこの村で

探していたのだ

眠りを、多分

光を、砂を、微笑みを」

前方の高台の上に大きな貯水池があって、粗壁のみすばらしい小屋がついている。喉がかわいている。淀んだ水の中には小魚がうようよして、藻が漂っている。顔を洗う。耳を澄ます。鳥が遠くで鳴いている。煙草を取り出す。私のマッチの灯りに驚いてトカゲが逃げていく。歩き始める。足元で何かがカサカサいっている。蛇？老人がロバを連れて通り過ぎる。私も通る。カサカサいう音は私のすぐ後ろで聞こえる。足を早める。まるで誰かとどこかで会う約束があるかのように。

家主は言った。「私は絶対捕まるんだ。あなたも捕まりますよ」

息子は「皆殺しだ！」と言いながら、足下の虫一匹殺せない。夜には自分の部屋で演説し、赤鉛筆で中庭の壁にスローガンを書く。殴られて、目の下に青痣がある。

老婆が草地の傍に座っている。風呂敷包みを抱えている。陽光が私の皮膚の下に沈殿する。私は、熱があるのにそれを喜んでいる人のようだ。老婆は何かを際限なく囁んでいる。

父は混乱している。皆を罵り、上物のレーズンを探し回っている。自家製の酒は悪臭を放っている。ムッシュ・アールダーヴァーズは鞭打ち20回の刑にあった。

娘のことを考える。15才で、恋をしている。裸足で木々の下を歩き、独り言を言っている。口は満杯だ。太ったものだ、とてつもなく。食べ物を寝床の下に隠して、夜中に食べている。いつも腹を空かせている。子供の頃には紙と消しゴムと鉛筆を食べたものだ。泥と木の葉と漆喰も口にしていた。それが今では恋をしている、我々の知らない誰かに恋をして涙を流している。

何千人の人が集団礼拝に立っている。何千人の人が跪拝する。私の横の女が震えながら祈りを唱えている。女達は黒いチャードルをかぶって路地を埋めている。私の詩人の友は入院している。気が変になって、ドアや壁に体当たりするのだそうだ。面会に行く。私の心は重く塞がっている。眠っている。半分意識がない。髪がぐっしょり汗で濡れている。母親が廊下で、ドアの傍に座ってボソボソと独り言を言っている。中にはいる。目の下と唇の横に青痣がある。

彼の細君には理解できない。細君は困惑し切っている。私を見るとワッと泣き出した。「この人は一体どうしてほしいんでしょう。怯えて罪の告白ばかりしているんです。日に200回も礼拝して、何もかも不浄だって。日暮れ時には屋根に上って『神は偉大なり』って叫ぶので、ご近所が家から飛び出してくるんです。夜には、神様が恐ろしくて寝られないって泣くんです」

信じられない。物静かで控え目な男だったのに！モハッラム月の夜には私の家にやって来たものだった<sup>(11)</sup>。腰を下ろしたきり、何も喋らなかった。私たちは耳を澄せたものだ、二人とも黙ったまま、見えない屋根の上からの「神は偉大なり」という呼びや、遠い通りからの聞き慣れない騒ぎや、暗闇の中の散発的な銃声や、近所の家の窓からの女の叫び声やらが、皆に蜂起を促しているのを。何百もの窓が開けられて、女子供や老人たちまでが外に飛び出しても、私の友は落ち着き払って、一言も発しなかったのに。

立ち止まる。空は緑色で、まるで植物でできているかのようだ。野は前触れもなく終り、乾いた土に覆われた荒れ地が私を不意打ちする。私の足の前には命とは無縁の砂漠が、暗い未知の大地に向かって這い進んでいる。それが尽きる所では、物言わぬ叫びが聞こえ、ぼんやりした影がのたうち合っている。砂は恐ろしく、誘い込まれるようだ、ちょうど貪欲にすべてを飲み込む女、夜の毒々しい香りと燃えるような息を撒き散らす女のように。

道に迷ってしまった。誰もいない。疲れている。空は暗くなろうとしている。戻らなければならぬと知りつつ前進する。砂漠が誘惑上手で残酷かどうか知らない。だが、魅きつけられる感覚に従って、私は進んでいく。

妻は言う。「隠れイマーム様<sup>(14)</sup>の居場所を知っていればねえ」

あの彼方は、行方知れずの魔物や精霊たちの住家だ。

うちの地区の警官が処刑された。細君は妊娠中で、毎年端の行かぬ子供たちを連れて四つ角にやってきては、車に石をぶつけている。

妻は空が燃える夢を見て怯えている。

私の手は、血の匂いがする。熱い、新しい血、名前すら知らぬ少年の血の。私の横にいたのだ。話をしていた。走っていた。小さな拳を振りかざして、兵士たちを威嚇していた。曲がり角で見失った。どこかが燃えていて、通りは煙と火に包まれていた。女たちは走り、男たちは急いで店を閉めていた。発砲が始まっていた。また、彼を見つけた。屈んでいた。手で木の幹を抱えていた。口を開いたまま、私を見詰めた。何か言おうとしていたのだ。息子と同じ年ぐらいだった、下の息子と。気が動転していた。救急車のサイレンの音が、私をおかしくしていた。彼を抱き上げた。重かった。息をしていなかった。助けを呼んだ。ある男の行く手を遮って、兵隊を呼びにやった。私は少年の頭を胸に抱いていた。14、5才にしか見えなかった。ポケットを調べたが、空だった。かわいそうに、やっと髭が生えかけたばかりの幼さだった。私はまだその手を握っていた。

妻が私を起こす。私の顔に水をかける。汗びっしょりだ。口が乾き、息ができない。窓を開ける。バルコニーに出る。雪が降っているのに、暑い。燃えるようだ。雪を手掴みにして、首に擦りつける。私の手は血の匂いがする、熱く、無垢な血の。

父は、圧制の時代が終局に近づき、一大悲劇が起ころうとしている信じている。

息子は、家主を殺さなければならないと信じている。息子は資本主義制に反対している。

娘は、相変わらず恋をしている。色とりどりの蝶と押し花のアルバムを持っていて、外国の俳優たちの写真を集めている。学校が休みなのをいいことに、昼まで眠っている。髪にビロードのリボンをつけ、爪を緑と黄色と紫に塗っている。

妻は、生産聖戦部隊<sup>(15)</sup>に心酔している。市内一斉清掃の日に、うちの地区的土の通りを箒がけし、排水溝の汚泥を歩道にぶちまけた。妻は、貧民向け住宅の確保にも関心があって、通りの入り口にあるモスクに銀の腕輪を寄進した。

誰かが、荒野の向こうから私を呼んでいる。誰か、目に見えぬ人が、私の横を歩きながら、喘いでいる。恐ろしい。立ち止まる。胸がドキドキする。砂漠がじっと私を見詰める。砂漠が私を飲み込む。不思議な感触が辺りを包み、私の回りを不安気な魂が彷徨っている。

私は尋ねる。「ハイダリーさん、あなたの成功の秘密は何ですか？」

妻は言う。「異教徒の体は、髪も爪も、体の湿り気だって、全部汚れているのよ」

荒野が脈打つ。揺れる。丘が動き、砂が流れて私を取り巻いている。私は独り言を言う。歌う。笑う。叫ぶ、「神は偉大なり」と。もっと大声で、腹の底から。私は走る。

学生たちは言う。「哲学打倒！反動打倒！」

学生たちは社会科学に首ったけだ。

立ち止まる。騒ぎは収まっている。荒野は馴染み深く、優しい。信じられない。夢か實か、私の目の前に緑の庭園があり、枝の間から白い屋敷が見えている。その現実離れした驚くべき優美さは、空想の産物のように思える。そっくり地面から生え出たか、それとも空から降って湧いたかのようだ。ゆっくりと、ためらいながら前に進む。目を逸らすと、消えてしまうのではないかという気がする。大きく息をすると壊れてしまうのではないかと思う。小さな半開きの戸が、南側にある。中にはいる。中庭は人気もなく、ひっそりとしている。緑の糸杉の古木が壁沿いに二列に並び、花壇は色鮮やかな草と小さな白い花に覆われている。真ん中には大きな池泉があって、澄んだ水は動かない。敷石はきめ細かい埃をかぶっ

ている。足跡ひとつなく、壁には手の跡もない。木の葉一枚動かず、風もそよとも吹かぬ。音もなく停止した庭の、この世のものとも思えぬ不思議さは、魔法の時代の庭園を思わせる。そして屋敷は、ヴェランダ付きで、高い列柱の間から水色の尖塔とガラス窓を見せて、空を背に鎮座している。軽く、はかないその様は、まるで空に吊されているかのようだ。

壁によりかかる。水の息吹が私を冷やし、私の命の千年来の埃を取ってくれる。私は足洗い場の縁に座って顔を洗う。飲み、楽しむ、何たる喜び！屋敷の姿が水の底で輝き、緑の木々が大理石のような水面を流れ、水槽は空の青色を溢れさせる。あたりを見回す。誰もいない。服を脱ぐ。水に滑り込む。切るように冷たく、皮膚が破れてしまいそうだ。骨の髓がひりひりする。頭を水につける。潜っていく。もっと深く。足が底につかない。目を開ける。水の下は明るい。くるりと回る。息が苦しい。水面に横たわる。魂が濡れてしまった。魂が震える。夕日が松並木の根元に沈む。木々は黄昏の中で背を伸ばしたように見える。私は再び屋敷に目をやり、心を奪われる。なんと素朴で親しみ深く、そして健全なのだろう！重々しさや物質感がなく、時の埃を感じさせず、まるで空に吐かれたはかない息のようだ。私に誰か、どこかを思いおこさせる。誰？どこだろう？誰か身近な、けれど忘れてしまった人、素晴らしい夢の始めに居た人、旧い記憶の始まりに。その人の清らかさ、神聖さは、まるで洗礼の場からやって来たかのようだ。私に天なる女性を、天なる体と水なる目を持った女性を思いおこさせる。そうだ、思い出した。それは私の母の結婚式の写真に似ているのだ。顔に白いレースを被り、羞らい深い処女のまなざしをし、指の間に四弁の花を飾った。またそれは、とある雪の晩、夜遅くに私たちを訪ねてきた人、父が私たちの遠い親戚だと言った、あの女性に似ている。そしてその人よりもっと遠い女性、私の太古の血縁の女性、時を超えた女性に。

水からあがる。歯がガチガチ鳴る。砂漠の夕暮れは、冷たく湿っぽい。服を着る。靴を手に持つ。裸足で歩き出す。階段12段。数える。誰かがヴェランダで礼拝した跡がある。モフル<sup>(10)</sup>が置かれたままだ。柵のない大きなヴェランダで、青い小花模様の白い敷物が敷かれている。中に入ると、明るいホールがある。無地の地味な壁に囲まれ、ベンチが置かれている。壁と円天井の境目は、漆喰の小花

で飾られている。窓の回りの鏡細工は清らかで控え目だ。ホールの二方向に半開きの扉があって、それぞれが一つの部屋に通じ、そこからまた別の部屋へと続いている。このようにどの部屋にも続きがあって、隠れた私室に至っている。廊下は折れ曲がり、階段はぐるぐる巡って、薄暗い。

階段の上まで上ると息が切れる。ここからは世界が隅々まで見える。空まではんの一步で着きそうで、荒野は地平線の果てまで続いている。永遠の国境まで。腰を下ろす。長い間。私はどこにいるのだろう。一体いつなのだろう。分からぬ。眠い。眠りは私の瞼の裏にあるが、脳には届かない。横になる。何時間も。星がポツポツと見えてきた。私は何を考えているのだろう？なんにも。私の視線は空を遊泳し、思考は渦のように私の意識の表面を巡っている。手足の感覚が段々なくなっていく。私の体は質量を失い、輪郭を崩してしまった。まるでヴェランダと木々と荒野に溶け込んでしまったかのようだ。目は星に吊るされているように思える。頭は突然因果関係の論理と時間の感覚を失う。誰からも何からも何と遠いことだろう。図形の幾何学的結合や物質の相互関係や絶対係数から、確立された関係や系統的思考から、壮大な法典の碑や分厚い道徳の書から、善行の奨励や罪惡の否定から、正しい人生作法や模範的存在様式から、あるいは物質支配や歴史的原則や観念の絶対的真理から、月經と出産の法則や初步的知性の顕現や比喩的手段から、東西問題や、抑圧者対被抑圧者の論争から、埋葬式の清めの方法から、神は死んだと言った者や、死を恐れていた者、そして救世主の現れを待ち焦がれていた者どもから、私は何と遠くにいることだろう。

目が覚めると、夜明けだ。まごついで、私は辺りを見回す。起き上がる。空腹で、何といふ気分だろう。軽々として、疲れが体から抜けてしまっている。心地良い風が吹いてくる。雄鶲が遠くで鳴く。小さな村が、遙かかなたの山裾で目覚めている。靴を履く。足音がする。下に降りる。老人が池泉の傍に座って沐浴している。豊かな顎鬚が白い。挨拶をする。老人はうなずいて、祈りを唱える。

私の足跡が階段の埃の上に残っている。扉の横まで立ち止まり、振り返って後ろを見る。これで最後だと分かっているので、心が疼く。屋敷は遠くから私を見る。夜明けの明暗の中で、その気高さ、完全さに私は震える。屋敷は何かを私に語っている。何か素晴らしい、健康的なことを。それは言葉に出来ぬものだ

が、私には分かる。そして分かることが嬉しい。

帰り道探しにはもう苦労しない。砂漠は落ち着いて静まり返り、恐ろしい誘惑の跡形もない。野原まで来て、私は近道して畑の中を進む。道路に着くとトラックが止まって私を乗せてくれる。黒い髪を生やし、日焼けした若者だ。

熱く、香り高い紅茶だ。クリーム、玉子、よく焼けたパン<sup>(17)</sup>。娘はバルバリー・パン<sup>(18)</sup>が好物だ。恋をし始めてからは量が増えた。

息子のことを思うと胸が痛む。妻は泣いて、息子は道を踏み外させられたと言う。礼拝の始めには息子のことを祈り、神様に物質主義が廃れ、帝国主義が滅んで、我々が皆幸福になれるようにと祈願する。

茶屋の給仕が尋ねる。「ほかに何か要りませんか」

かぶりをふる。その子を眺める。その生き生きと健康的で、真面目なことといつたら！なんと喜々として！

町の宿の部屋に帰る。テヘランから何度も電話があったこと、昨夜会う約束をしていた友人が訪ねて来て、メッセージを残していくことを知る。急いで帰らなければならない。急用ができた。メッセージはテーブルの上に置いてある。学生たちがストライキに入り、教授たちは座り込みを計画している。服を集め、鞄を持って出発する。ガソリンスタンドは閉まっている。小声で悪態をつく。ガソリンは少ししかないが、コム<sup>(19)</sup>まではもつ。トラックやロバや荷車で道路は大混乱だ。コムに着くと道路が閉鎖されている。遺体を運んでいるのだ。待つ。群衆が祈りの言葉を送っている。黒衣の女達が、くっつき合って進んでいく。空気は埃っぽく、汚水と死体の匂いがする。暑い。壁沿いの日陰に立って道が開くまで待つ。

広場の脇で行く手を塞がれる。車両証明書を見せろと言う。見せてやる。トランクを点検している。旅行鞄と車の下と服のポケットを検査される。もう出発できる。眩暈がする。私は煙草の端を噛み、唾を吐く。警笛を鳴らして叫ぶ。一人の女が拳で私の車のバンパーを叩いて罵る。その女の子どもが泣く。

道路に着くと加速する。トラックが情け容赦もなく、気違いじみた速度でビュンビュン走って来る。もし生きてテヘランに帰れたら奇跡というのだ。車のミラーに映った自分の姿を見てげんなりする。窓を開ける。死んだような灰色の土

とゴツゴツの岩山だ。

妻は尋ねる。「隠れイマーム様はどこにいるの」

父は酔って、家主の細君を追い回している。タールを叩き壊して、革命歌を歌っている。

私は尋ねる。「ハイダリーさん。あなたは絨毯をどこへ輸出したんですか」

明日の朝早く、会議がある。約束していた論文は未完のまま、まだ着いていない。友人の葬式に行かねばならない。

妻は言う。「あなた、気をつけてね。反革命分子が待ち伏せしてるわよ」

テヘラン近郊の煉瓦工場の釜が遠くに見えてきた。後ろの車が警笛を鳴らして、道を譲れといっている。横には行けない、前が詰まっているのだ。警笛を鳴らして、脅し文句を叫んでくる。車を降りて殴ってやりたい。煤煙と燃料の匂いが辺りに満ちている。少しでも酸素を求めてハーハー息をする。空はアスファルト、地平線はタールで塗りつぶしたかのようだ。そしてセメントの様な雲が私の頭上を動かない。空気は分厚く、粗く、私の視線とぶつかる。重い心で、悩み多い将来を思っていると、突然、セメントで固められたような灰色の地平の底から、天の小窓が開き、そこに屋敷の姿が現れた。それは、奇跡か天祐のように、瑞々しく馨しい姿で、そろそろと進んで来る。私にはそこにあると分かる、いつもそこにあると。その天国の息吹は様々な物共の背後に隠されているが、時折、前触れもなく、私に会いにくるだろう。蒸し蒸しする物悲しい夕暮れに、望みの破れた暗い夜に、明け方の素敵な夢の中に、奇跡を求める痛々しい期待の中で、そして死の時にも、それが私と居るであろうことを、そして私の心を守り立てるであろうことを、私は知っている。この常に存在するもの、この完璧なるもの、私の魂の太母が。

1979年 夏

## 注

- (1) Bozorg-banū を「太母」と訳したのは、タラッキーがユング派の心理学に興味を持ち、いわゆる「グレート・マザー」のペルシア語訳にこの語を用いていることによる。
- (2) Sohrab Sepehri (1928–1980) は、カーシャーン出身の画家で、「新神秘主義」とも評される独特の詩風を持つ詩人でもあった。この作品中にも、彼の詩を思わせる風景描写がここそこにみられる。白血病で早逝した彼は、故郷に眠っている。
- (3) Faridoun Farrokh, introduction to “‘The Great Lady of My Soul’: A Story,” *Iranian Studies*, XV, 1-4 (1982), 211-212による。
- (4) シーア派第8代のイマームで、その廟のあるマシュハドはシーア派信者の重要な巡礼地のひとつである。
- (5) ここではホメイニー師を指す。
- (6) シーア派の最高位聖職者の称号。
- (7) mosalsal-e Yūzī.
- (8) ホスロウ・ルーズベフ(—1954)は元大尉で、士官大学で教鞭も取ったエリートであったが、軍内部にトゥーデ党(イラン共産党)組織を作ろうとしたかどで逮捕され、1946年に15年の刑を宣告された。当時の裁判で堂々たる左翼擁護論を展開したことで知られる。その後、脱獄したが、再び捕えられて処刑された。
- (9) シーア派の宗教的規則の解説書。
- (10) 5弦の楽器。
- (11) アルメニア人の名。アルメニア人はキリスト教徒なので、革命前にはアルコールの販売に従事していた者もあった。
- (12) nan-e sukhari. ビスケットのように乾いて軽いナーン(パン)の一種。
- (13) モハッラム月は、イスラーム太陰暦の一月にあたり、シーア派信者にとっては、イマーム・ホセインの殉教した月として特別な意味を持つ。普段でも殉教劇を中心とした様々な行事が行われるが、1978年冬のモハッラムには、

宗教行列が反政府デモと一体化するなど、革命成立に拍車をかける重要な月となった。

- (14) シーア派の中でもイランで広く信仰されている12イマーム派では、第12代のイマームが突然お隠れ（gheibat）の状態になったとし、いつの日か再臨して世界に正義をもたらすというメシア信仰がある。
- (15) 革命後に結成された組織で、イスラーム革命に貢献することを目的に、農村や都市で奉仕活動を行う。
- (16) mohr. シーア派信徒が礼拝の際に用いる素焼きの小板。
- (17) nân-e bereshteh.
- (18) nan-e barbarî. 2、3 cmの厚さの円形または楕円形の平たいナーンの一種。
- (19) テヘランの南約50kmに位置する都市。シーア派第7代イマームの娘マアスマの廟を中心とした宗教都市で、カーシャーンからテヘランに至る街道上にある。